

# 学校を 「窒息状態」に追い込む統制

安倍内閣は「戦争する国」「企業が世界一儲けやすい国」をめざしていますが、同時に「教育を支配・統制する国」もめざしています。

教育の統制強化は、2000年前後から「教育基本法改悪」をはじめすでに数多くすすめられました。今次安倍内閣は、それを「まだ不十分」として、教育への支配・統制を強化し、徹底を図ろうとして、より乱暴な「教育への政治介入」がつつぎつつぎと起っています。

本特集では、この政策動向とそれがもたらしている事態に焦点を当て、そこで初任者をはじめ教師たちの「叫び」を取り上げます。統制は教員制度改悪にとどまらず、学校現場の教科指導・生活指導に、より踏み込んだ「画一的基準（スタンダード）」の押しつけにおよんでいます。「もの言わぬ従順な教師」と「自分で考えない従順な子ども」とをセットで育成する政策です。それはまさに、教育の本質を破壊する「行政犯罪」です。

いま起こっている事態への批判として、それがどれほど憲法や法治国家の原則に反するか、また戦後世界で国際的に積み上げられた「教育への権利」と「教育の自由」に反するかを明らかにする論文を載せました。さらに良心的な校長の立場から、いまの事態がどのように見えるか、校長としてどんな工夫がありうるかを書いてもらいました。

日本の教育を「窒息状態」に追い込むようなこうした支配・統制の強化が本当にまかり通っていいのか？ 本特集が、この点を読者のみなさんとともに考えあう広場になれば幸いです。